Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語の主題の位置付けについて : 形容詞文を中心に
Author(s)	Tuptim, Natthira
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/836
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【9】

氏　　名	Tuptim Natthira（タップティム　ナッティラー）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第　２３２３４　号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学 位 論 文 名	**日本語の主題の位置づけについて－形容詞文を中心に－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　三原　健一 （副査） 教　授　仁田　義雄　　教　授　小矢野哲夫　　教　授　宮本マラシー 准教授　堀川　智也

論 文 内 容 の 要 旨

本稿は、修士論文に続き主題について考察を行うが、タイ語の主題を中心に考察した修士論文と異なり、本稿は日本語の主題を中心に考察する。日本語の研究において主題の研究は発展しており、高い成果を挙げているといえる。この成果をもとに、形容詞文における主題について考察する。

日本語においては主題を示す主題標識があり、それは「は」という形式が担う。日本語の主題は「は」でマークされることにより、様々な構文において同一のものとして扱われることが多い。しかし、本稿の分析した結論としては、主題文が同じ「は」でマークされても、形式の上では同一視することができるが、主題と後続命題[1]の関係の観点では同一視ができない場合がある。これを前提に、本稿の分析を進める。

日本語の主題に関する研究は多大な実績を持っている。しかし、現実には主題に対する認識は統一的ではない。具体例を述べれば、「主題 - 解説」の関係の捉え方の相違が挙げられる。

「主題 - 解説」の関係は、「述べられる対象」と「（その対象について）述べる内容」である。具体例を挙げて説明する。

(1) 魚は鯛がおいしい。

「主題 - 解説」の関係を広義的に捉えれば、(1) は「主題 - 解説」の関係が成り立つ文となる。だが「主題 - 解説」の関係を狭義的に捉えれば、(1) は「主題 - 解説」の関係に成り立たない文となる。

まず、本稿がいう狭義的な捉え方について説明する。「主題 - 解説」の関係を益岡 (2004) を援用して説明すれば、「主題 - 解説」の関係の主題は、文の内部的成分であり、文内の要請により主題が与えられるのである。この「主題 - 解説」は属性叙述述語文と密接な関係を持つ。すなわち、属性叙述述語文は主述関係を持つ文である。そして、これらの文の主語は通常主題という形で表れる。つまり、「主題 - 解説」の関係は主述関係によって保証される。(1) は本稿の分析した結論によれば、「魚」は「鯛がおいしい」の主語ではない。つまり、(1) は「主題 - 解説」の関係に成り立たない文であるといえる。

それに対して、(1) が「主題 - 解説」の関係に成り立つ文とする広義的な捉え方は、「主題 - 解説」の関係において「述べられる対象」と「(その対象について) 述べる内容」の定義にある、「について」を重視すると考えられる。本稿は、狭義的な捉え方を取るものとする。その結果、(1) のような文は本稿にとって「主題 - 解説」の関係を持つ文ではなく、(1) の主題は文の前提として最初から存在するものと捉えられる。さらに、述語とは意味的関係を成していないことから、こうした主題を純粋主題と名付ける。また、純粋主題は「主題 - 解説」の関係を持つ文の主題と異なり、文の冒頭で後続命題の内容を限定する。つまり、文の後部にある命題後続が生じる“場”を限定する。

文の後部の後続命題が生じる場を限定することは、状況成分を主題化する状況主題からも観察できる。状況主題は「格助詞＋は」の形態を取っているが、対比の意味が感じられにくい。こうした状況主題はいかなる場を限定するかというと、後続命題の内容が成り立っている時間的・空間的な背景を示すのである。

[1] 後続命題とは述語部全体を指す。モダリティに対する命題の意味ではない。

純粋主題も状況主題も場を限定することにおいては同一の特徴を持つが、限定する場の意味は若干異なる。そのため同じ文の中に一緒に現れることがある。本稿では、一文に二つの異質の主題が表れることが可能であると主張する。その際、一文に二つの主題が表れる文を二重主題文とするが、この種の主題文は日本語と主題の研究の中で本格的に考察されてこなかった。

次に、本稿で「主題 - 解説」の関係に立つ文として挙げる文を見る。本稿は、狭義的な捉え方、つまり主題が主語的主題である立場を採用すると述べた。それを踏まえ、主語でありながら主題でもあるという現象について、本稿の分析により明確な考察を行う。

(2) 象は鼻が長い。

「象」は後続命題「YがZ」、つまり「鼻が長い」の主語であり、「鼻が長い」は「象」の性質や特徴を述べる述語である。この記述は新しいものではない。「鼻が長い」が「象」の性質や特徴を述べる述語ということは、「鼻が長い」が叙述性を持つということを示す。さらに、「鼻が長い」は単純述語文の「PはQ」の「Q」と同様、一まとまり性を持つ。これによって、「YがZ」は「Q」と同様の扱いが可能となる。つまり、本稿ではこのような文は、従来表記されてきた [$_S$X-wa [$_S$Y-ga Z]] とせず、「YがZ」を [$_{AP}$ Y-ga Z] のように表示する。この表記を採用することにより、「X」と「YがZ」との主述関係が明確に把握できる。さらに、「YがZ」で共起する「Y」は主語であるが、述語の一部になることは主語としての典型的な現れ方ではない。主語は一般的に文の成立にかかわり、文全体や述語に対して他の成分と異なった位置づけや関係を担う存在である (仁田1997:171)。このような主語の特徴を踏まえれば、「Y」は主語として典型的な現れ方ではないことは妥当である。つまり、「Y」を含む「YがZ」は文として独立性が欠けており、「YがZ」は文「S」より形容詞句「AP」として捉えた方が適切である。

「X」つまり「象」が主語的主題であることにおいて、「X」は形容詞句 (AP) が示す性質や特徴の持ち主として主語である。「X」は本稿のテストフレーム

として挙げられる「そう（だ）」の代用表現に準じれば「X」は文末表現にかかっている。つまり具体的に述べれば、文末の「だ」にかかるのである。この記述も目新しいものではないが、主語的主題という名付けは明示的に示される。

ここで再度主張するが、本稿では主題文が同じ「は」でマークされても、形式の上では同一視することができるが、主題と後続命題の関係の観点では同一視することはできない。この主張が妥当であることは次のコト名詞句の主題文によっても証明される。

(3)　ちょっと神経質なゴリラだったが、いなくなるのは、さびしい。
(4)　言葉が必要ないとき、言葉を発するのは、悲しい。

一見したところ、形式の上で（3）と（4）には違いがない。しかし、本稿では（3）と（4）は異なる意味解釈を持つと考える。日本語の「PはQ」においては、条件的解釈が可能である（三上1960）。「PはQ」に条件的解釈があるのは、主題文の特徴から導かれると考える。すなわち、主題文の「PはQ」において、Pの主題はQの解説に先立って先行される部分である。つまり、PとQの間には生起の順序があるといえる。そして、「PはQ」に上記の特徴があるために、条件的解釈になる場合がある。本稿では「PはQ」が条件的解釈になるか否かは、2つの要因があるとまとめられることを提示する。一つは談話による要因（有田1992）、もう一つは文の性質による要因（堀川2006）である。だが、前者については本稿では取り上げないことにする。後者の文の性質による要因は、（3）と（4）の相違に重要な役割を果たすと考える。本稿では、PとQの間には生起の順序があることを前提としている。その結果、（3）と（4）に戻ると、（3）には継起的関係が潜在しており、本稿のテストフレーム、つまりシテ形接続との置き換えによってこの継起的関係が強調される。さらに、（3）にはPに立つコト名詞句の主題の事態と「さびしい」という感情形容詞の特徴から、因果強化読みという解釈が与えられる。だが、（4）はこのような意味解釈にはならず、属性描写文である。こうした（3）と（4）の違いの要因は、コト名詞句の主題の事態にあると考えられる。（3）のコト名詞句の主題の事態は個別・一回的な読みが可能であるのに対し、（4）のコト名詞句の主題の事態は複数読みの方が可能である。つまり、（3）と（4）のような意味解釈の違いは、上の各文の性質によるものである。

この（3）と（4）の相違は、これらの文をタイ語に訳すと明確に示される。

(5)　ちょっと神経質なゴリラだったが、いなくなるのは、さびしい。
ตอนอยู่ ก็กวนประสาทดีเหลือเกิน แต่ไม่อยู่แล้ว ก็<u>ชวนให้</u>เหงา(เหงา<u>ที่</u>มันจะไม่อยู่)
tɔ ɔ nyùu kɔ ɔ kuan prasàat dii lɯ ɯ akə ə n tɛ ɛ mâi yùu
lɛ ɛ o kɔ ɔ <u>chuan hâi</u> ŋ ǎ o (ŋ ǎ o <u>thîi</u> man cà mâi yùu)

(6)　言葉が必要ないとき、言葉を発するのは、悲しい。
<u>การ</u>พูดในเวลาที่ไม่ต้องการคำพูด ช่าง<u>น่าเศร้า</u>
<u>kaan</u> phûut nai weelaa thîi mâi tɔ ŋ kaan khamphûut
châaŋ <u>nâasâo</u>

（5）では結果を表す語句chuanhâi（**ชวนให้**）と括弧の中のような原因を表すthîi節が共起し、文形式は主題文ではない。一方、（6）は名詞化接頭辞のkaan（**การ**）で名詞化される主題の文形式である。さらに、「悲しい」は価値や状態、属性を表すときnâaをつけて形容詞のnâasâo（**น่าเศร้า**）として表れる。つまり、（3）の日本語はタイ語において（5）のように因果を示す文となるが、（4）の日本語はタイ語において（6）のように属性描写文となる。

タイ語の主題については、日本語の主題に関する成果を生かして考察する。タイ語においては（6）のように主題標識が示されていない場合、「は」に似ている働きを持つ主題を表す形態的手段nà とníiが用いられる。さらに、タイ語の二重主語文、二重主題文及び状況主題文を概観すると、タイ語の主題のあり方は日本語の主題に非常に類似していると結論付けられる。本稿のタイ語の主題分析が、今後の主題分析の発展の契機になれば大変喜ばしいことである。

本稿は「は」は、後続命題の内容の範囲を設定するために存在することを明

らかにした。主題の中に純粋主題、状況主題、主語的主題などという異質の主題があることは、主題が後続命題に対する関係によってもたらされることである。本稿ではこれらの主題について明確に考察できたと思われる。

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、形容詞文における主題を中心に扱い、形式的には同一であっても、少なくとも３種類の異質の主題文があることを論じたものである。典型的な文例は、「魚は鯛がおいしい（背景的関係）」、「象は鼻が長い（主題解説関係）」、「ちょっと神経質なゴリラだったが、いなくなるのは、さびしい（継起的関係）」の３種である。また、日本語の分析から得られた知見を母国語であるタイ語に適用し、タイ語でもnà/nîiという主題標識を用いた主題文が可能であり、継起的関係を除き、日本語の様相と平行していることを立証している。テーマの設定が適切であること、仮説の論証における論理の流れに大きな破綻がないこと、論証に際して用いたテスト枠が妥当であること、各章が互いに有機的関係でまとまりをなし一つの博士論文として結実していることなど、多くの優れた点が見られる。さらに、日本語話者ではない留学生が、主題文という長い研究史を有する困難なテーマに挑戦し、適格な文法性判断と共に、一定の成果を挙げたことは特筆に価する。また、本博士論文は、動詞研究に比して論考の数が少ない形容詞を論じた点でも、今後の研究に資するところが大きいと評価される。無論、完全無欠な論文というものはあり得ないので、本博士論文にも考察が不十分な点は存する。以下に、審査委員から指摘された問題点を幾つか挙げる。

まず、論文タイトルが「日本語の主題の位置づけについて―形容詞文を中心に―」となっているが、主題文には形容詞文以外にも動詞文・名詞文があるので、主題文全体の中で、形容詞文における主題をどのように位置づけるかという論点が必要であるとの指摘があった。また、「純粋主題」という名称について、主張との間に多少の不整合がある点も指摘された。筆者は、「象は鼻が長い」における「象は」を、主語・（複合）述語関係に立つという意味で主語的主題と呼んでおり、「魚は鯛がおいしい」における「魚は」は、主語・述語関係に立っておらず「主題」としか呼びようがないものなので、主語的主題とは別扱いとし純粋主題と称している。しかしながら一方では、純粋主題は主題―解説関係にはないと言っており、「主題」という名称との間に齟齬がある。また、論述の細部には、読者に誤解を招く流れも存在する。先行研究を取り上げた幾つかの箇所で、その分析を採用しているのか、あるいは批判しているのか明確に記されていない部分があり、筆者の主張が多少ぼやけている箇所があることも指摘された。ある概念について、誰が最初にそれを主張したのかという研究史的観点において、記述が正確でない部分があることも改善を要する点であろう。

しかしながら、以上のような不備はあるものの、本博士論文が学位に値する十分な業績であることは、審査委員全員が一致して認めるところである。新たなデータ開発という点においても、特に、継起的関係に立つ主題文という、これまで体系的に研究されてこなかった文タイプを広範に論じたことは、今後の主題文研究に資するところ大であると評価された。